

「おお！　こりや見事な！」

警察署内の会議室で、両津の歓喜の声が響き渡った。

彼の視線の先にいるのは——。

「も～、これ恥ずかしいのよ？　完全に水着じゃない……！」

「わ、私も……いくら両さまに見せるとはいえ少し……際どすぎますわ……はみ出そうで……」

——金髪グラマラス美女の麗子と、黒髪グラマラス美女の麻里愛だった。

二人が着ているのはセクシーポリスの衣装で、下はお尻に食い込むビキニパンツで、上も警察官の制服をイメージしたような水着。

それは麗子と麻里愛のそのエロすぎる爆乳　ナイスバディを際立たせるものだった。

この水着のような服は、警察の広報ポスターの撮影用と称して両津が購入したもので、その姿で撮影をして、その写真を売ろうと画策していたりもする。

「それで、両ちゃん？　ここで撮影するって……どうすれば良いの？　ただ立ってれば良いわけ？」

「ん？　そうだな…………」

際どすぎる衣装にその大きすぎる、90オーバーのおっぱいを隠そうとする麗子が、照れつつも両津の悪だくみに気づかずに真面目に撮影だと思っている。

麻里愛もそれは同じであり、お尻に食い込むビキニを気にしたりしていき、少し動くたびにその規格外とも言える爆乳をたぶたぶ揺らしていた。

それを見ていて両津は「どうすれば一番儲かるか」などと考えていき、少しだけ悩むと、また悪だくみを思いついた顔をして携帯電話を取り出してどこかに連絡を始めた。

そして、両津の電話から数分後、会議室には——。

「ぼ、僕が犯人役をやるんですかあ？」

「うむ、お前が適任だ！　これも警察の広報ポスターのためだからな、立派な公務だ！」

——中川がやってきたいた。

いきなりやってきて、警察の広報ポスターの犯人役をやれと言われて「まいったな」など

と言いながらも両津に逆らうつもりはないのか、素直に言うことを聞いていく。

制服から適当な服に着替えると、中川と麗子、麻里愛はそれぞれ準備して両津の指示を待つ。

「それで、両ちゃん……どうすれば良いの？ 恥ずかしいんだからね？」

「そうだな……よし、二人で中川を取り押さえろ！ 犯人をセクシーポリスが捕まえるシーンを撮るぞ！」

「ええ？！ いきなり取り押さえられるんですか……？」

両津の指示に中川は困惑するも、麗子と麻里愛は「早く終わらせよう」として左右から迫っていく。

まずは麗子が中川の腕を組むようにしてその爆乳を——。

“ぼにゅうんっ”

「ほら、動かないで？」

——思いっきり押し当てていく。

サイズもハリも完璧な美爆乳“それを水着越しに押し当てられると流石に中川も緊張していく。”

その反対側からは麻里愛が、麗子には一步劣るもの規格外とも言えるそのデカパイを——。

“むにゅうっ”

「直ぐに終わらせますので少しご辛抱をよろしくお願ひいたしますわ」

——押し付ける

その、二人のおっぱいのあまりの大きさと柔らかさに中川は「うう……」と唸りつつ、少しでも身体を逃がそうとしていく。

それは勃起てしまっているから、どうにか股間を隠そうと、それが無理でも目立たないようにチンポジを直そうとする動きでもあった。

しかし、両腕はしっかりと固定されている手逃げられないし、少し動くたびに——。

“むにゅうつ”

“ぽにゅうんつ”

「ちょっと、圭ちゃんあんまり動かないでって……」

「んんっ、お胸が揺れてしましますわ……」

——二人のその爆乳が揺れてしまい、その感覚も自分の腕にしっかりと伝わってきてしまう。

そんなことを繰り返していく内に中川のチンポは完璧に勃起してしまっていた。

今のところバレてはいない。両津も主に麗子と麻里愛の爆乳、括れた腰を撮影するのに興奮していて中川に注意なんて払ってはいなかった。

なんとかやり過ごせるかと思っていると、両津から「まだ足りんな、よし！ 二人とも中川を床に押し倒して取り押さえろ！」との指示が飛ぶ。

中川は一瞬拒否しようとするも、立ったままよりかは勃起がバレないかと思い、うつ伏せに床に倒れたのだが——。

「それだとインパクトが足りんなあ……麻里愛！ 中川を仰向けにさせて、その上に麗子と麻里愛が乗れ！」

「ええ！？ 先輩！ それはっ——あ！」

「ごめんなさいですわ中川さん……よっと……！」

——両津の指示により麻里愛は中川をあっさりとひっくり返して仰向けにさせる。

その状態で金髪、黒髪の爆乳セクシーポリスの二人が——。

「もうっ、これで最後だからね？ 圭ちゃん重くない？」

「失礼しますわ……っ」

“むにゅうつ”

——中川の上へと乗っていく。

中川の身体に重なるように乗ったスタイル抜群の二人。

その二人におっぱいを押し付けられ。かつ健康的かつ肉感的な足が股間を擦っていく。

「わっ……わ……！　二人とも……ちょっと！」

どうにか逃れようとするも二人に乗られては身動きも出来ずに身体を揺らすくらいしか出来ない。

その上で、麗子も麻里愛も——。

「両ちゃんが満足するまで我慢して、ね？　んんっ❤　そんなにモゾモゾしないでよ！」

「そうですわ、これもお仕事ですもの……っ❤　あんまり動かれると……」

——撮影を終わらせることを優先していく。

そうなると中川に逃げ場所なんてなくて、二人の90を余裕で超える爆乳を押し当てられ、押さえつけられていく。

ふんわりと漂ってくる良い匂いにクラクラさえってきて、完全に勃起したチンポはズボン越しに麗子と麻里愛の美脚に擦られていく。

「っ……！　このままじゃ……！　っ！」

少しでも逃げようと、どうにかしてチンポジだけでも変えようと動くも——。

「もうっ！　だから動かないで圭ちゃんっ！」

“むにゅうう❤❤”

「っつ！　れ、麗子さんっ……！」

——あんまりモゾモゾ動く中川を押さえつけようとして、麗子は体重をかけてそのデカパイを思いっきり押し当てていく。

「ほら、麻里愛ちゃんも！」などと促された麻里愛もその爆乳を押し当てて、二人のおっぱいで中川は身動きを封じられていく。

その興奮の中、麗子と麻里愛の甘い——クラクラと来る香りに包まれながら爆乳を押し当てられて、少し動くたびにチンポが二人の美脚に擦られていく状況についてには限界を迎えてしまう。

「あ……あああ…………あ……」

「え……？　あ……」

「どうかしましたか…………あ…………」

中川の異常に二人は気づいて最初は心配して身体を起こしていく。

だけど、直ぐに以上の理由に気が付いた。気が付いてしまう。

彼のズボンの股間、そこに出来ている染みと臭いに、二人はあっさりと気が付いた。

「「……………」」

「ん？　どうかしたのか？　撮影はまだ終わってないぞ？」

出すものをしてぐったりとしている中川。

彼を麗子も麻里愛も軽蔑しきった視線で見下していた。

撮影に夢中だった両津は原因に気が付かない今までいて首を傾げていく。

二人はそんな両津に軽く手を振ると立ち上がり——。

「…………サイテー」

「…………お仕事中に何を考えてるのですか？」

——冷たい視線を中川に向けていく。

そして未だに理解出来ていない両津に「本田さん呼んでくれない？　寺井さんでも良いけど……“あの人”は嫌」と犯人役の交換を申し出していた。

中川はそれを聞きながら、しばらく倒れたままフラフラとその場を後にした。股間に染みをつけたまま。